

第二の歴史家論争

——ホルスト・メラーのエルンスト・ノルテ顕彰を巡る論争（二〇〇〇年）の展開——

今野 元

1 二つの歴史家論争

一九八六年の「歴史家論争」はよく知られているが、二〇〇〇年の「歴史家論争の再来」⁽¹⁾はあまり知られていない。エルンスト・ノルテが「ドイツ財団」から「コンラート・アデナウアー賞」を授与され、その顕彰役を「現代史研究所」所長ホルスト・メラーが引き受けたことが、大きな論争を呼び起こしたのである。この事件については、当時のドイツで大いに話題になったにも拘らず、いまだに研究が存在しない。これは歴史家論争が多く分析を生み、しかもそれが大抵の場合、ハーバーマス側への連帯表明になっているのとは異なっている。⁽²⁾このように研究動向が違う理由は、この論争の展開過程にあるのではないだろうか。本稿では、その事実経過を整理したいと考える。

この事件に関しては、現代史研究所文書館所蔵の史料がある（D101226, ID 34334）。これは同研究所がメラー関係、ヴァインクラー関係の当時の新聞・雑誌の記事を集積したもので、バイエルン地方紙などの切り抜きもある。授賞式のパンフレットなど、関係者しか入手できない史料

もあるため、利用価値は高い。本論の3は主にこの史料に依拠して記述する。なおメラーの顕彰講演、ノルテの受賞講演・謝辞、ヴァインクラーの辞任要求など主要文書は、史料紹介的な意味で、紙面上可能な範囲で抄訳を載せた（／は段落の切れ目）。

2 論争勃発の歴史的文脈

(1) 「一九六八年の理念」の支配：

エルンスト・ノルテの「発言禁止」

エルンスト・ヘルマン・ノルテは歴史哲学者である。一九二三年一月一日、ルール地方ヴィッテン郊外のカトリック家庭に生まれ、ハッティンゲンで育ったノルテは、左手に生来の障害があつて兵役を免れ、フライブルク大学教授マルティン・ハイデッガーなどに学んだ。同教授オイゲン・フィנקのもとで論文「ドイツ観念論及びマルクスにおける自己疎外と弁証法」で博士号取得後、一旦バート・ゴードスベルクのニコラウス・クザーヌス・ギムナジウムの教師になったノルテだ

ったが、テオドル・シーダーに見出されて、その編集する『史学雑誌』(Historische Zeitschrift)に論文を採用され、一九六四年にケルン大学に教授資格論文として認定された最初の著書『その時代におけるファシズム』では、世界的名声を得た。一九六五年にマールブルク大学に招聘され、やがて一九七三年にベルリン自由大学教授となったノルテは、比較ファシズム思想研究で有名になり、ハヨ・ホルボルン教授の招聘でイェール大学客員教授となり、国内でもベルリン自由大学教授トーマス・ニッパードイなどから高い評価を受けた。^③日本でも「ドイツ現代史研究会」(京都)の翻訳により、ノルテのファシズム論は紹介され、基本的には高い評価を得ていた。^④

ところが一九八六年、フランクフルト大学教授ユルゲン・ハーバーマス(一九二九年)のある批判が、ノルテの学者的・社会的人生を変えた。ハーバーマスは、ノルテのレーマーベルク講演「過ぎ去ろうとしない過去」(一九八六年六月六日『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG』掲載^⑤)を、ソヴェエトの「アジア的」蛮行に責任転嫁してドイツ国民社会主義の「過去」を相対化するものだとして批判したのである。ハーバーマスは、ノルテと並んでアンドレアス・ヒルグラーバー、クラウス・ヒルデブランド、ミヒャエル・シュトゥルマーのことも、歴史を動員してドイツ国民意識を煽動しているとして批判した。^⑥このタイミングでのハーバーマスの批判は、もちろん前年の連邦大統領リヒャルト・カール・フォン・ヴァイツェッカー男爵(一九二〇年―二〇一五年)の五月八日連邦議会議演説からも刺戟を得ているだろうが、単なる「過去の克服」の唱道ではない。一九八二年にシュミット政権(SPD・FDP)が崩壊してコール政権(CDU/CSU・FDP)が誕生し、十三年ぶりの保守勢力に政権が回帰したことは、左派知

識人にとっては警戒すべき事態だった。彼らは、一九七〇年代の緊張緩和、一九八〇年代のペレストロイカと、東西融和の機運が高まっていることを歓迎していたので、「共産主義」脅威論はそれに水を差す不都合な議論だと思われたのである。冷戦期に資本主義自由主義圏の左派知識人(社会主義者・左派自由主義者)が、マルクス主義に多かれ少なかれ好意を寄せ、マルクス主義に疑いを隠さない者を「保守派」と呼んで敵視し、ソヴェエト連邦やドイツ民主共和国との交流にも熱心だったことは、一九八〇・九〇年代の知的雰囲気を経験した世代なら、まだ誰もが記憶している「過去」である。^⑦

ノルテは「歴史修正主義」との批判を受けたことで、生涯に互りドイツで社会的抹殺の扱いを受けた。「過去の克服」を徹底し、ドイツ国民アイデンティティを批判するというのが、学生叛乱以降のドイツ連邦共和国で支配的となった「一九六八年の理念」である。それでもヒルグラーバー、ヒルデブランド、シュトゥルマーへの更なる批判はなかったのに対し、ノルテにだけは徹底した個人攻撃が継続された。どうしてノルテのみが死去に至るまで、しかも「共産主義」批判がドイツ連邦共和国で解禁され、流行にすんなった一九九〇年以降も、村八分のままだったのか、その理由は判然としない。恐らく、(一)哲学者ハーバーマスの「過去の克服」論の出発点が哲学者ハイデッガー批判であり、その直弟子である歴史哲学者ノルテが目立つ存在だったこと、(二)現実政治の左派的主導を唱道するハーバーマスの「社会哲学」に対し、ノルテの歴史哲学はニルンベルク裁判なども含めた戦後政治秩序を超越した内容を展開し、時流を揶揄することも止めないので、政治的に正しくない、空気を読まない、不遜だという印象を与えたこと、(三)ノルテの生産力、普遍的な思想体系が、反対派にとっては戦後政治秩序を掘り

崩しかねない知的脅威に、いわばカール・シュミットの再来に思われたこと、などがあつたものと推測される。ノルテはその思想内容を批判されただけでなく、ドイツでの刊行自体ができなくなり、ノルテに対する暴力行為も始まった。ノルテによると、彼の通勤用の自家用車が放火され、講演に向かう彼に反対派から未確認の液体が投げつけられ、病院に緊急搬送されたという。ベルリン自由大学を一九九一年に退官したノルテに手を差し伸べたのはイタリアやフランスの研究者たちで、ノルテの研究が国外で刊行された時期もあつた。晩年のノルテは西洋文明論に傾斜し、「共産主義」、「ファシズム」に続く「第三の急進的抵抗運動」としての「イスラム主義」を考察の対象にするようになっていった。⁸⁾

反ドイツ・ナシヨナリズムを掲げる「一九六八年の理念」は、「ドイツ再統一」後もその勢いを増していった。「ゴールドハーゲン論争」、「ホロコースト警鐘碑建設問題」¹⁰⁾ などについては、従来も論じられてきた通りである。

(2) 「一九九〇年の理念」の反抗：

現代史研究所の「全体主義」論への傾斜

とはいえ一九九〇年の「ドイツ再統一」は、ドイツ連邦共和国の政治文化に変動をもたらさずにはいなかった。社会主義体制崩壊はマルクス主義者だけでなく、マルクス主義者の果敢な「保守派」攻撃に共感し、資本主義・社会主義陣営の共存及び西独内の左派主導を目標としてきた左派自由主義者たちにとっても、一大痛恨事であつた。ドイツ国民国家が復活したことは、西独の「ポスト・ナシヨナル」な秩序を称揚していた彼らにとって青天の霹靂であつた。「ドイツ再統一」に違和感を表明するハーバースやギュンター・グラスの言論活動は、日本でも入念に

紹介された通りである。¹¹⁾

「ドイツ再統一」の刺戟を受けて、ドイツ社会の一部にドイツの国家的・国民的主体性を恢復しようという思想的潮流も勃興していった。これを「一九九〇年の理念」と呼んでおこう。¹²⁾ その代表作は、論文集『自意識を持った国民』である。これはボート・シュトラウスの「高まる山羊の歌」に呼応して編まれた論文集で、ライナー・ツイーテルマン、カールハインツ・ヴァイスマンら若手文筆家のみならず、ノルテ、CSU政治家ペーター・ガウヴァイラーも寄稿している。¹³⁾ かつてハーバースの親友だったマルティン・ヴァルザーが、一九九八年にホロコーストを「道徳の棍棒」扱いしていると論じ、ユダヤ人中央評議会議長イグナツ・ブービスと論争になったことも話題になった。¹⁴⁾

こうしたなか、一九九二年にホルスト・メラーが「現代史研究所」(Institut für Zeitgeschichte) 所長に就任したことは、ドイツ歴史学界の転換点となった。一九四三年プレスラウ生まれのカトリック教徒メラーは、ベルリン自由大学でニッパードの下で博士号を取得し、その助手を務めていた人物で、エルランゲンニュルンベルク大学教授(一九八二年―一九八九年)を経て、パリのドイツ史研究所所長(一九八九年―一九九二年)を務めていた。メラーは博士論文ではフリードリヒ・ニコライを扱い、ドイツ啓蒙思想研究者として業績を積んだが、同時にヴァイマル共和国史に視野を広げ、現代史研究所の副所長として学術機関運営の実務経験を積んでいた。このメラーがミュンヘンの現代史研究所の所長に就任したのである。¹⁵⁾

現代史研究所は、連邦及び七州(バイエルン・バーデン・ヴュルテンベルク・ブランデンブルク・ヘッセン・ニーダーザクセン・ノルトライン・ヴェストファーレン・ザクセン)の出資で運営される、いわば国

立歴史学研究所である。その出発点は国民社会主義研究だが、いまだは第一次世界戦争以降の時代を包括的に扱うに至っている。この現代史研究所は、『現代史四季報』(Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte)を刊行し、学術会議を企画し、史料を保存・整理し、史跡を管理するだけでなく、政府機関からの歴史に関する鑑定依頼に答申する任務も負っているため、憲法問題における連邦憲法裁判所のように、ドイツ政治に直結する機関だとも言える。

この現代史研究所の所長にメラーが就任したことは大きな政治的意義を有した。ブランド・シュミット政権下の研究所を率いたのは、マルティン・ブロシャート(一九二六年―一九八九年、在職一九七二年―一九八九年)¹⁶であった。ブロシャートはドイツ「過去の克服」論の先駆者の一人で、その著書『ドイツのポーランド政策の二百年』(一九六三年)は西独側からのドイツ・ポーランド政策批判の草分けである。歴史家論争でもブロシャートはハーバーマスに加勢し、シュトゥルマー、ヒルデブランドら「歴史家ツンフト」を揶揄しつつ、ノルテが歴史学を侮辱したと非難している。¹⁸とはいえ死後十四年経った二〇〇三年になって、歴史家ノルベルト・フライの指摘により、ブロシャートのNSDAP 党員歴が明るみになることになる。¹⁹このブロシャートが一九八九年に在職のまま死去すると、所長職が空席のまま副所長が事務を引き継いでいたが、そこにブロシャート所長の下で副所長(一九七九年―一九八二年)²⁰を務めた経験があつたメラーがパリから戻つたのである。しかもメラーは、それ以前の所長とは異なり、レーゲンスブルク大学(一九九二年―一九九六年)、ミュンヘン大学(一九九六年―二〇一一年)の正教授職を兼ねることができた。²¹メラーは、後述のようにベルリン自由大学の助手時代に教授ノルテと協力して学生叛乱に対処していた。歴史家

論争でもメラーは恩師ニッパードと歩調を合わせ、感情的批判を問題視して議論の「即事化」(Versachlichung)を要求していた。²²しかもメラーは一九九〇年代にはヘルムート・コール連邦宰相の顧問を務めており、一九九八年連邦議会選挙ではコール再選のために運動していたといふので、メラーの所長就任が現代史研究所の方針転換との印象を与えたことはいうまでもない。

メラー就任後の現代史研究所は、(一)国民社会主義研究の史料の基盤整備、(二)国民社会主義研究以外の領域開拓、を行なってきた。(一)について、特に目を惹くのは『ゲッベルス日記』編纂であり、また(メラー所長就任前の一九九一年から始まっているが)『ヒトラー――演説・文書・命令』は『我が闘争』を除くアドルフ・ヒトラーの文書を網羅的に収集したものである。ちなみに、爆破されたオーバーザルツベルクのヒトラー山荘を展示施設にし、現代史研究所が管理するようになったのもメラー就任後であった。²³(二)について、注目すべきは現代史研究所が支所をベルリンに二箇所設けたことである。一箇所はベルリンIIミッテのドイツ外務省内で、これは『ドイツ連邦共和国外交文集』の編纂のためである。この支所は、外務省がボンにあつた一九九〇年にはすでに同地に設けられていたのが、首都移転に伴い移転したものである。もう一箇所はベルリンIIリヒターフェルデの旧米軍駐屯地内で、これは同地にあるベルリン連邦文書館所蔵の旧ドイツ民主共和国文書を用いた社会主義体制研究のためである。国民社会主義研究及び社会主義研究は、現代史研究所の分類では「二〇世紀の独裁」として一括されるに至つた。二つの独裁を一括して批判する発想は「全体主義」論を想起させる。社会主義体制の批判的研究は、メラー時代に現代史研究所の新しい目玉となつていった。

一九九九年からの「国防軍展覧会」開催とそれに対する批判は、「一九六八年の理念」と「一九九〇年の理念」との激突の予兆となった。「国防軍展覧会」は、大手煙草製造業者の父から遺産を相続した億万長者ヤン・フィリップ・レエムツマ（一九五二年）の率いる「ハンプルク社会研究所」が企画した。NSDAPと比較して好意的に評価されてきたドイツ国防軍についても、その犯罪を明るみにするというのは、「一九六八年の理念」を突き詰めた企画である。これに対し各地の展示会場では、国防軍擁護派による抗議行動が起り、ときとしてそれは暴力化した。それだけでなく、ポーランド人歴史家ボグダン・ムシアウ（一九六〇年）らが、「国防軍展覧会」が使用する写真にソヴィエト軍のものが混在していると指摘し、メラーがこの機会を捉えて、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG』でこの展覧会を「失態であつて、本当に先駆的功績でも何でもない」と叱責した。ノルテ受賞はその半年後の出来事であつた。²⁸⁾

3 ノルテ受賞を巡る論争の勃発

(1) ノルテの「コンラート・アデナウアー賞」受賞

論争の発端はCDU/CSUに近接した「ドイツ財団」(Deutschland-Stiftung)が二〇〇〇年にノルテに「コンラート・アデナウアー賞」(学術部門)を授与することを決定し、メラーが受賞者の顕彰講演を引き受けたことであつた。前年の同財団式典では、CDU党首アンゲラ・メルケルが受賞者ヴォルフガング・シヨイブレへの顕彰講演を行ったが、メルケルはノルテへの讃辞を求められた際には、「受賞者との個人的困難」を理由に断り、授賞式典への出席すら見送る方針を打ち出した。²⁹⁾

ノルテによると、メルケルが断つたためメラーに顕彰講演が依頼されたのだという。³⁰⁾ この賞は、学術(Wissenschaft)、文芸(Literatur)、言論(Publizistik)の三部門に加え、「自由賞」(Freiheitspreis)が設けられており、歴史家では学術部門でハンス・ヨアヒム・シェプス、アンドレアス・ヒルグラーバー、ハンス・ペーター・シュヴァルツなどが、言論部門でアルミン・モーラーが受賞していた。政治関連ではオットー・フォン・ハプスブルク・ロートリンゲン大公(言論部門)、ルシアス・クレイ米陸軍大将(自由賞)、アルフレート・ドレッカー(自由賞)、ヘルムート・コール(自由賞)、ヴォルフガング・シヨイブレ(自由賞)が受賞していた。³¹⁾

ノルテ受賞が知れ渡ると、新聞雑誌には早速批判が開始された。二〇〇〇年五月二二日、『南ドイツ新聞』文芸欄に、ビスマルク批判で知られる歴史評論家ヨハンネス・ヴィルムス(一九四八年)が、ノルテのファシズム論に改めて疑問を提起し、同財団のナショナリズム体質を攻撃すると共に、メラーの讃辞披露を「スキャンダル中のスキャンダル」と呼ぶ記事を發表した。³²⁾ 同日にはまた『フランクフルト・ルントシャウ』が、「ドイツ財団」議長クルト・ツイーゼル(一九一一年―二〇〇一年)が、当時若い体制派ジャーナリストとして、一九四四年七月二〇日のヒトラー暗殺計画者の「抹殺」を要求していた事実を報道した。³³⁾ 同年五月二八日には、ダッハウ収容所協会会長のマックス・マンハイマー(一九二〇年―二〇一六年)が、ノルテの受賞、メラーの讃辞披露を非難する声明を「ナチ体制被害者連盟」に送付した。³⁴⁾ 五月三一日には中道左派エリートの週刊新聞『ディ・ツァイト』に、ジャーナリスト・歴史家のグスタフ・ザイプト(一九五九年)が記事「エルンスト・ノルテへの顕彰講演はどう行うのか?」を發表し、メラーを「ツン

フトの代表者」と呼び、CDUの国民社会主義との連続性、ブランドト東
方政策への反対を改めて糾弾した。⁽³⁵⁾ 同じく五月三十一日には『フランクフ
ルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』が、ベルリン大学教授ハイン
リヒ・アウグスト・ヴィンクラー（一九三八年）の批判を掲載した。
ヴィンクラーはミュンヘン現代史研究所の学術顧問でもあるが、研究
所への被害を考えて、メラーに顕彰講演を断念するよう書簡で要請した
という。ヴィンクラーによれば、ノルテの名前は一九八〇年代以降、ド
イツ史像の国民弁護論的修正と結び付いており、彼の多くのテーゼが急
進右派のそれと異ならないのだという。⁽³⁶⁾ ヴィンクラーはすでに一九八
六年にもノルテを非難する論説を発表しており、歴史家論争の一当事者で
あった。⁽³⁷⁾

六月二日にはミュンヘン大学など同市内の左派系諸団体（緑の党
系、SPD系、PDS系など多数）が連名で現代史研究所にファックス
で「ホルスト・メラー教授への公開書簡」を送り、メラーに顕彰講演を
断念するよう訴えた。⁽³⁸⁾ 同日の『デル・ターゲスシュピーゲル』ではシュ
テファン・ライネケが、ヴィンクラー書簡を全文引用しつつ、プロシャ
ート所長時代の現代史研究所を称讃し、後継所長の「保守派メラー」が
「社会・自由系のプロシャート時代を終わらせた」という「元研究所員」
の苦情を（実名を挙げずに）引用した。⁽³⁹⁾ 六月三・四日版の『南ドイツ新
聞』では、エリザベート・パウシュミットの記事「黒い穴のなかで」
で、やはり匿名の「事情通」「かつての学派の共感者」の意見を交えつ
つ、連邦宰相コールの意向でメラーに所長が就任してから同研究所は没
落したとし、直前に現代史研究所が「国防軍展覧会」の事実誤認を指摘
したことを、同研究所の「国民保守主義的」(nationalkonservativ) 転換
の表れとした。⁽⁴⁰⁾

(2) 「コンラート・アデナウアー賞」授与式典

「コンラート・アデナウアー賞」授与式典は、予定通り二〇〇〇年六
月四日にミュンヘン王宮ヘラクレス・ザールで行われた。パンフレッ
トの冒頭に歓迎の辞を載せたのはバイエルン自由国首相エドムント・シ
ュトイバー（一九四一年）で、更にCSU政治家などが続いた。

ホルスト・メラーの「エルンスト・ノルテ教授への顕彰講演」は次の
ようなものであった——異例ながらこの顕彰講演には前置きが要る。高
い水準や紛れもない個性を備えたノルテの作品は国内でも国際的にも注
目を集め、いわゆる歴史家論争以来、猛烈な批判の対象になった。彼は
論争を恐れず、寧ろその強い個性及び解釈で煽りもした。授与式典は学
問的対決の場ではないが、一言付け加えたい。私はノルテの幾つかの物
言いに同意しない。特にヒトラーの大量虐殺を伴う反ユダヤ主義の意図
を「歴史的に理解する」という意味で追体験しようとした試みで、それ
でノルテは（NSのユダヤ人殺戮の罪を）相対化したとの非難を受けた
のだった。ノルテは国民社会主義をますますボルシェヴィズムへの
反動及びその暴力体制の模倣として説明しようとし、私はこれに同意し
ないものの、ノルテが六百万以上の欧州ユダヤ人の殺害など国民社会主
義の犯罪のいかなる無害化、相対化とも無関係だということは確信して
いる。そう思えなかったらここに立っていないだろう。なぜなら私は
この犯罪は許せないと確信しているのだから。J・フェストは一九九三
年に、ノルテが弁護論を展開したという批判は的外れだと述べている。
実際ノルテは厳格な道徳主義者で、困難を厭わず、寧ろ自分で困難を探
しているかのようだった。彼は、あるイデオロギーが唯一の正当性を主
張することで起きた大量虐殺を非難する必要を感じたのであり、彼はド
イツ国民社会主義が最悪だが、それが決して唯一のものでも、最初のも

のでもなかったと考えたのである。／だが不当にもすでにノルテのこの種の表現が誤解された。二〇世紀に起源を有する他の全体主義イデオロギーがあることは、国民社会主義を許すことにはならないし、逆もまた真である。ノルテはそんなことを言っておらず、比較や時系列的整理をしただけである。／ノルテの作品と対決することは正当であり必要だが、その議論が排除、中傷、憎悪を伴いがちなのは、ドイツにおける言論の自由にとって悪しき現象である。「自由とはいっても、別な考えをするという自由である。」このR・ルクセンブルクの金言は、残念ながらドイツでは定着していない。私はベルリン自由大学での、学問の自由を巡るノルテとの共闘の日々を思い出す。当時私はT・ニッパードイのもとで博士号を取り、助手をしていた。左派過激主義の脅迫から身を守るうとしていたのは、国民社会主義からの亡命を経験したR・レーヴェンタール、E・フレンケル、O・v・ジムゾンで、若い世代ではR・シヨルツやニッパードイだった。ノルテの政治的位置づけは簡単ではないが、過激主義に反対し思想の自由を守る姿勢は明瞭だった。／アウシュヴィッツのあとでは詩は書けないとT・アドルノは言ったが、ドイツで歴史を書いたり政治をしたりすることはできるだろうか。できると、アデナウアーは一方について、ノルテは他方について証明した。／アデナウアーはドイツ「特有の道」を終わらせ、キリスト教信仰の上に法治国家・民主制を築いた。対抗馬のシューマッハーも、反全体主義という基本合意を共有していた。／西ドイツではアウシュヴィッツ後の政治とはあらゆる狂信的イデオロギーの排除だった。／二〇世紀を扱う歴史家の課題とは何か。アウシュヴィッツを理解することは不可能で、同意することが不可能だけでなく、我々とは縁遠い当時の原則で解釈することも不可能である。／国民社会主義は歴史研究の対象であるだけでなく、

現在でもある。ノルテ講演「過ぎ去ろうとしない過去」を想起して欲しい。歴史家であれ非歴史家であれ、この時代を他の時代と同じく怒りも情熱もなく扱うことは難しい。価値中立的な客観性は、かくも軽蔑に値するこの残酷なイデオロギーや独裁を扱うには方法的に不十分なのである。／同時に学問の原則は断念されるべきではなく、好き勝手に歴史を描いてよいということにはならない。歴史家が大量殺を前にしてどれほど「茫然自失」し「悲嘆」にくれたとしても、学問の原則は残る、いや却って必要になるのである。プロシヤートの言葉「国民社会主義もまた『歴史化』されなければならない」はこうした意味を帯びている。／門外漢には常に共感可能ではないかもしれないが、極端に非合理的なものも合理的に説明されなければならない。この合理性は学問には不可欠で、同情する気持ちがないのだと思うのは誤解である。解釈の次元と経験的再構築の次元とは区別されなければならない。／多くの事実が経験的観点で確定していても、解釈は大抵の場合確定していない。ノルテ作品の場合も、経験的に再構築された事実を踏まえながらも、メタ次元で「普通の」歴史学に大きな挑戦をしようとしてきた。H・ルドルフはノルテを、歴史家の間では「一匹狼」だと呼んでいる。私はノルテを、歴史家(Historiker)というより歴史思想家(Geschichtsdenker)だと思っている。／アウシュヴィッツも異なる解釈がなされているが、ノルテが依拠した全体主義モデルは、ブジェジンスキ、C・フリードリヒ、H・アーレント、K・D・ブラッハーが共有し、またヒトラー・スターリンの二重の伝記を書いたA・ブロックにとつても、全体主義イデオロギーの双子の性格というのは指導的観念だった。アーレントが両者の共通性を探究したので国民社会主義を相対化したことになるというのは、馬鹿げた仮定だろう。／全く逆に、大量虐殺及び第二次世界戦争が生ま

れた起源としての今世紀の全体主義イデオロギーを分析する研究文献こそ、政治における反全体主義的基本合意と関係しているのである。つまり歴史認識から政治的教訓を得るのである。／今世紀の世界戦争やイデオロギー史に関する重要著作で有名になったほとんど全ての著者が茫然自失している。A・ミッチャーリヒが嘆いたような「悲しむことのできない性格」なのではなく、繰り返し返さないために解明するのである。／数十年にわたるノルテの功績はこの点にこそある。彼の作品は独特なので、多くの批判や無理解に遭遇したが、彼の現象学的で弁証法的な思考様式もその原因だった。全体主義イデオロギー対自由民主主義法治国家原理の衝突、独ソの両イデオロギーの戦争は歴史的文脈及び両者の連関性においてのみ理解され得るのである。／ノルテはM・ハイデッガーの学生で、E・フッサールの現象学にも通じた。ギムナジウム教師となったノルテは「若きムツソリーニにおけるマルクスとニーチェ」でT・シーダーに見出され、『その時代におけるファシズム』で高い評価を得た。／この著作で教授資格を取ったノルテは、マールブルク大学を経てベルリン自由大学に移り、引退まで教えた。／ノルテはイエイル大学、マサチューセッツ工科大学、イエールサレム・ヘブライ大学などで客員教授を務めた。／「ファシズムは反マルクス主義である」というノルテのテーゼは一九六三年以来のもので、当時は最大限の同意を得たものが、のちには反撥を買うようになった。／イデオロギーに煽動された大量殺戮の比較研究も正当に必要な手法だった。比較は歴史家の道具であり、決して犯罪の赦免ではない。厳密にいえばどんな大量殺戮も比類なきものである。ユダヤ人共同の記憶にとつてはシヨアは比類なき意義を有している。／だが残念なことに、欧州内外では複数のイデオロギー的に狂信化した独裁が数百万単位の殺戮を起こしたのであり、その説明が必要であ

ることもまた事実である。／ノルテの最初の著作の功績の一つに、政治的にインフレになっていったファシズム概念を学問的に使用可能にしたことがある。更に時系列的整理により、ボルシェヴィズムとファシズム、国民社会主義との近接性・弁証法的関係を論じたのも功績である。その問いの正当性は、共産主義独裁の崩壊後、『共産主義悪書』が証明した。／だがソヴィエト収容所がアウシュヴィッツと比較して「より本源的」だ、国民社会主義者がボルシェヴィストの階級憎悪を人種憎悪に置き換えたというような表現は、有益とは言えない。時系列や構造だけでなくイデオロギーの内容が問われるからである。／「自由主義体制」や市民的・キリスト教的価値観などを共通の敵とし、支配手法の一部がボルシェヴィズム起源だったとしても、国民社会主義独裁はボルシェヴィズム独裁のコピーではなく、因果関係には限界がある。そこでは「大ドイツの生存圏」や「反ヴェルサイユ・コンプレクス」が軽視されている。／ただノルテとの間で必要なのは、ハーバーマスのような誹謗ではなく、即事的対決である。仏伊ではF・フユレなどの歴史家もノルテと議論してきた。ノルテを読んだ上で反論するべきだと、哲学者・作家BⅡH・レヴィは述べている。／ノルテは国民保守主義史学の論者だということも誤りで、彼の歴史学は国民国家的枠組を越えている。／ノルテは歴史哲学的に「現代の位置づけ」を行ったのであり、ヘーゲル、カント、デイルタイ、シュベンゲラーに連なる者である。／ノルテの作品はテーマ的に広範で、手法的に革新的なものもある。一九七四年の『ドイツと冷戦』は、ドイツ分断を第二次世界大戦だけではなく、「進歩的」大國たる米ソの世界史的対決によって説明する試みだった。／一九八三年の『マルクス主義と産業革命』は、産業革命と国民経済学及びイデオロギー史の発展との弁証法を論じたもので、工業化初期のイギリスからレー

ニン主義の発展までを見据えたものである。／このようにノルテは、内なる連関性を有しながら国民社会主義とは全く異なる現象をも扱っている。／ニッパードイはノルテのファシズム比較を高く評価しつつ、ノルテ退官記念論文集に彼への応答を掲載したが、こうした対応をする者が少なかったのは残念である。

ノルテの受賞講演「歴史修正主義」とは何か？^(註)は次のようなものであった——一九九九年のドイツ出版界平和受賞の際、独生ユダヤ人だった米歴史家F・スターンは謝辞で、西欧諸国の多くが「歴史修正主義の潮流のなかにある」と述べた。「最大の重荷を負う」ドイツは一番早く、四十年以上も前にこの修正主義を始めた、だが開かれた議論はようやく獲得されたものだから、これからも続いて欲しいという。実際ドイツは一九四五年の直後に、小ドイツ主義的＝プロイセンの歴史観の自己礼讃から訣別したのであり、その歴史修正主義の代表格がF・マイネツケの小品『ドイツの破局』なのだ。／だが六〇年代初めになると、A・J・P・テイラー『第二次世界戦争の起源』及びD・ホッガン『強要された戦争』が、正反対の意味での歴史修正主義を展開した。型破りとはいえ英歴史家ツンフトで認められた一員だったテイラーは、当時のオーデル・ナイセ国境否認に見られるドイツの一貫した修正主義的傾向を指摘し、ヒトラーを特別視するべきでないとした。教職のないアメリカの若者だったホッガンは、ヒトラーを擁護し、寧ろ英ハリファクス外交が戦争の原因だったとした。／だがすぐに新たな修正主義がドイツ及び国外に登場した。M・プロシャートやH・モムゼンは、欧州ユダヤ人の絶滅政策を、ヒトラー個人の意図ではなく、戦時ドイツ社会で徐々に発達した機能であり、主要責任を追うのはヒスマルク創建の帝国の「指導層」だとの機能論を展開し、ヒトラーの責任を強調するのは進歩派

の、あるいは社会民主党の意味でのドイツの根本的再編成を妨げる「弁護的」議論だと非難したのである。／逆説的なことに、ヒトラーにもドイツ指導層にもドイツ民衆にも責任を課さない否定論者には、目立った政治的意図が見られない。彼らは仏人P・ラシニエ、R・フォリソン、米人A・バツツといった外国人である。元収容所囚人でのち社会党国民議会議員となったラシニエは、解放された元囚人幹部があまりにSSに責任を負わせ、「囚人頭」や「抵抗」の側に劣らず問題があったことには触れないのを問題視した。／ここ十年のドイツ及び外国の文献では、歴史家論争からS・クルトワの『共産主義黒書』にかけての現象に「歴史修正主義」が結び付いている。つまり「共産主義の犯罪」の強調によりホロコーストが「相対化される」というものである。／「修正主義」を辞典で引くと、E・ベルンシュタインの「窮乏化テーゼ」批判を否定的に見る呼び方だとの説明がある。また毛沢東の紅衛兵が「文化大革命」で「修正主義への闘い」を呼号して儒教的伝統を破壊したのも記憶に新しい。／戦間期ドイツでは「ヴェルサイユの命令」を批判する歴史家も「修正主義」の名称で呼ばれていた。／アメリカでは、南北戦争に勝った北部が南部の奴隷州に勝った進歩と自由の力を称揚する歴史観を広め、これに批判が提起されたことがあった。／古典古代にはヘロドトスがペルシャを描写する際、ペルシャ由来の誇張された表現を除外したが、これも「修正主義」である。同じことはトゥキディデスにも言える。／「何が「歴史修正主義」なのか？」という問いは正当である。／過去十五年でいうと、皆さんの前に立っている男が「歴史家論争」の元兇だとして、「修正主義」の名で呼ばれている。R・ツイーテルマンらが「ノルテのSA」だと呼ばれたり、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』が「オールド・ファシスト」ノルテを

再び迎え入れたなどと表現されたりもした。／ハンブルク二〇世紀社会史財団のK・H・ロートは、『歴史修正主義——全体主義理論の再生』を刊行し、全体主義理論は大量の人権侵害を正当化する理論だと説いている。／J・メクレンブルクとW・ヴィッパーマンは『共産主義黒書批判』を刊行し、階級殺害を人種殺害と区別し、懸命に擁護している。／ファシズムはもう五十年も存在していないのに、いまだに彼らと対決するという反ファシストがいて、(体制として崩壊した共産主義の)「死体に鞭を打っている」として反共産主義者に憤慨したりとか、マルクス主義・半マルクス主義(halbmarxistisch)の論者が、(ブルジョワという)近代の最古・最強の敵イメージを掲げつつ、同時にシュミットの友敵論を批判するだとか、ニユルンベルク判決からの如何なる逸脱も民衆煽動罪に問うだとかいう光景は、まさに諷刺にしかならない。／イタリヤではデ・フェリーチェのような反ファシズム神話の批判者でも、批判されこそすれ排除されることはない。以下でマルクス主義的起源を隠さないD・ロスルドの一九九六年の著書『歴史修正主義』を見ていく。／ロスルドはE・バーク、C・シュミットからH・アーレント、A・v・ハイエク、F・フユレ、E・ノルテに至る反革命の系譜を広く「歴史修正主義」に勘定し、彼ら「修正主義者」が「白黒図式」を描き、英米の先例を度外視して仏露革命のなかにのみ「ホモ・イデオロギクス」を見ていると批判した。／ロスルドは、米大統領T・ルーズベルトにもヒトラーのイデオロギーを先取りするものがあつたとし、第一次世界大戦でのイギリスの反独扇動にも厚顔無恥なものがあつたとした。／こうして修正主義批判者ロスルドは自ら修正主義者になつていった。ロスルドの指摘によれば、西欧列強と違いソヴィエトは初めから植民地解放の側にいたのであり、カティンなどでソ連に殺されたポーランド軍将校には、

反ユダヤ主義ゆえに処刑された者もいるという。／ロスルドを単なる共産主義やソ連の弁護者と見るなら不当で、彼はカティンの虐殺を正当化したのではなく、理解可能にする試みに批判的に取り組んだのである。／ロスルドはまた「第二の三十年戦争」論を提起し、国民社会主義がアングロサクソン式帝国主義の極端な形態だつたとの考えなどを示している。／自分はこの講演を批判者よりましな「修正主義」の定義をすることによってではなく、どこに歴史修正主義の困難及び必要性があるかを示すことで終えたい。／修正は学問の最も日常的な課題で、盛んに宣伝された展覧会でも不適切な展示があれば修正が必要だが、それは修正主義ではない。／ユダヤ人中心主義によるホロコーストの「唯一性」主張は、シンティ・ロマやアメリカ人の被害者を貶めることになる。／ソヴィエトと国民社会主義とを同列に置く構造的「全体主義」に対しては「左派的」「進歩的」修正主義が戦っている。構造ではなく過程に注目する「全体主義」論は、「赤」が「茶」に先行することに注目する。／この歴史修正主義がいかに大きな困難に直面しているかは(N.S.の評価が二転三転したことを想起すれば)すぐ分かる。ヒトラーやN.S.は欧州のほとんど全ての政党から罵倒されつつ政権につき、内戦のような野蛮さでその権力を固め、近代欧州に比類がないほど苛酷に少数派を弾圧した。ヒトラーやN.S.は数年間、ドイツや他の欧州諸国で多大な共感を浴びたが、そこで表明された共感、彼らの敗戦後は隠蔽されなければならなかった。戦後はN.S.の犯罪が大々的に暴露され、ヒトラー個人のみならず、N.S.体制全体も、遂には一つの大きな国民全体が糾弾されるという前例なき事態が生じた。理解可能にしたいという歴史学の原則の対象から、この体制やこの男を除外しなければ、非難を想定しなければならぬのだろうか。／当時の記憶が薄れるにつれ、全体主義論が後退

し、NSを「絶対悪」とみなして、その再来を防ぐという考え方が擡頭したが、そのなかで反ファシストが自由主義・民主主義批判をNSと共に有していたことが忘却されていった。／『その時代におけるファシズム』は刊行当時「全体主義」論を克服したと称讃されたが、実際はそれを洗練し歴史化したのである。「歴史修正主義」は国を越えた現象で、特定の学派ではなく、各地で並行した思考である。

ノルテは更に受賞謝辞を披露した——「ドイツ賞」受賞に際しドイツについても語る必要があるが、私は自分についても語らねばなるまい。／M・ライヒヒルニツキは、私が「歴史家論争」でユダヤ人を害虫に準えたという。／また彼はハーバーマスのノルテやヒルゲルバーら「修正主義的」歴史家との対決をも称えている。／「ドイツ財団」がライヒヒルニツキやハーバーマスの批判を間違ひ、少なくとも一面的だと勇氣をもつて認めてくれたことに私は感謝する。／ハーバーマスやライヒヒルニツキとの対立は初めからのものではない。我々の世代はドイツを単純に愛することができなかったが、C・フランツ、F・W・フェルスターのようにカトリック的ニ大ドイツ主義的な家庭に育った自分は特にそうだった。／『その時代におけるファシズム』は、一方で「東部戦線」を「怖るべき侵略・奴隸化・絶滅戦争」と性格規定してイスラエルの歴史家にも褒められたが、他方でファシズムを特殊な反マルクス主義と位置付けた。／『欧州内戦』（一九八七年）は、ソヴィエト共産党が最初で最強の絶滅組織であり、のちにそれに呼応してできたNSDAPはそれほど包括的ではない、「歪んだコピー」以上のものではないと説いた。「十月革命」への共感拡大にヒトラーらが反応したのは明らかである。／ヒトラーの「反ユダヤ主義」にも、そこに虚構や誤解が含まれていたとしても、我々が理解可能な「合理的中核」、つまりあとから

理解し共感ができるそれなりのきつかけがあったのであり、「全くの妄想」だったというわけではない。／知識人はその実存的敵対者に対しても、それが没落したあとであっても、客観性への意志を示さねばならない。「欧州内戦」から「世界内戦」へというパラダイムは、肯定的「ドイツ中心主義」、否定的「ドイツ中心主義」、マルクス主義、進歩主義、ユダヤ主義、構造的全体主義論に続く第七のパラダイム、つまり歴史・生成論的全体主義論である。／否定的ドイツ主義は一九六八年以来発達し、「ホロコースト」を重視するユダヤ主義と融合した。ポジティブな「ドイツ」概念が再び獲得されうるとしたら、それは国防軍展覧会やゴールドハーゲンの巡回のような運動に抗したのちに、ようやくのことなのである。／こうした（六八年以来の）攻勢のなかにも「合理的中核」はあるわけで、それはつまり「世界文明」への止まらない移行過程での経験なわけだが、この過程はそのイデオログたちが思っているほど単純ではない。人間は境界を抜け出そうとするだけでなく、境界を設定しようとする生き物である。歴史学は「デリケートな」領域でも「理解可能にする」営みを断念することはできない。被害者や道徳主義者がそれを道義的正当化だと批判するとしてもである。私は人間の理性を信頼している。／挨拶はここで終え、実践の原則を三つ述べる。①「集団帰責」は国民社会主義の主要な特徴であって、「ドイツ」に向けられたそれは克服されなければならない。②国民社会主義の目指したことの反対物が何でも良い、正しいという発想は卒業するべきである。出発点では正当な敵意が結果的に内なる依存性を生み、自分の道を見失うことがあるから。③計画中のホロコースト警鐘碑は、否定的ドイツ中心主義の一面性を記念碑化するものであるのみならず、傾向としては永遠化にもなる。それはドイツ国民の多数派ではなく、「物知りの少数派」の作

品である。ただ事実として存在するに至った警鐘碑は、ユダヤ人に限らず「二〇世紀のイデオロギー諸国の全ての犠牲者に」捧げられたものと見ればよいのではないか。

(3) 授賞式後の論争

式典直後から受賞への反応が新聞雑誌に続々と現れた。二〇〇〇年六月五日の『デイ・ターゲスツァイトウング』では、ダニエル・ハウフラーがメラーは現代史研究所所長を辞任するしかないと主張した⁽⁴⁴⁾。六月五日の『デイ・ヴェルト』では、ペーター・シュマルツがメラーのノルテ顕彰が条件付きのものであったことを強調した⁽⁴⁵⁾。六月六日の『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトウング』でも、ライナー・ブラジウスがメラーのノルテ評価の文面を引用しつつ、その内容が顕彰と批判とを含んでいたことを指摘した⁽⁴⁶⁾。

六月一四日、現代史研究所の研究者二十九名が、連名で『南ドイツ新聞』に読者投稿を行い、六月三・四日のバウシュミートの記事を批判して以下の三点を述べた。(一)メラーのノルテ顕彰及びその報道については研究所内で「激論があった」(kontrovers diskutiert)。ノルテの命題には研究所の多くの研究員がすでに以前から批判的に取り組んでおり、いまもそうである。(二)現代史研究所ではメラー所長就任後も批判的研究を行い、学問の自由が保持された。その点でバウシュミート氏を説得しようとは思わないが、彼女も『南ドイツ新聞』を注意深く読むならば、同紙がいかに頻繁に現代史研究所について肯定的に報道してきたかが分かるだろう。(三)バウシュミート氏が匿名の非公式研究員のみになんぞ依存するのは問題だろう。本当に言うことがある者は、公の場で意見を言う勇氣を持つべきだろう——以上のような内容の投書は、現代史研究

所の公式サイトにも掲載された⁽⁴⁷⁾。とはいえ新聞は、メラーの一件が現代史研究所にいま身を置いている若手研究者の経歴を傷つけるのではないかと報じ始める。彼らはこれから博士論文、教授資格論文を書き、定職を探索しなければならぬ。メラーはこれまで競争的資金の獲得が抜群に得意だったが、今後状況が変わってくるとの予想も出された⁽⁴⁸⁾。

ヴァインクララーは二〇〇〇年六月一五日の『デイ・ツァイト』に以下のようなメラー宛書簡を全文掲載した——メラーは私が五月二六日書簡で止めるよう願ったことを敢えてした。ノルテの幾つかの中心的命題に距離を置いて、称讃が留保を上回っている。メラーは個人の立場だと言うが、彼は現代史研究所所長及び独露現代史研究共同委員長に他ならない。メラーは両官職に被害を齎した⁽⁴⁹⁾。この授賞式は政治的なものである。ノルテは国際主義的左派を攻撃する右派過激主義の論客である。彼は第二次大戦を欧州統合戦争だったとまで言った。／こういう人物だからメルケルCDU党首は顕彰するのを避けたのである。／メラーがノルテを顕彰したのは、七〇年代の連帯意識からである。／前回の同研究所学術顧問会議で私は、国防軍展覧会批判は概ね正しいが、研究所が「反レムツマ研究所」、「右派の闘争研究所」に見られぬようにと警告した。メラーは自分の功績を自分で汚してしまった。メラーが六月四日以降も所長で居られるとは思わない——以上のようなヴァインクララーの辞任要求には、ビーレフェルト大学教授ハンス・ウルリヒ・ヴェーラー(一九三一年—二〇一四年)、ベルリン自由大学教授ユルゲン・コッカ(一九四一年—)ら歴史学界の名立たる左派言論人たちも歩調を合わせた⁽⁵⁰⁾。

六月一五日のうちに、メラーは現代史研究所所長としてヴァインクララーの辞任要求への応答を執筆し、翌日発表した。メラーは、ヴァインクラ

ーが一九九七年に、ムッソリーニ及びヒトラーの擡頭には共産党に共同責任があることを左派が理解しようとし、ノルテの命題は馬鹿げているが、彼の出発点の問いは間違っていないと述べていたとし、ヴィンクラーにとつて肝心なのはノルテではなく、自分や現代史研究所を誹謗する見え透いた運動なのだとした。メラーは、所長や現代史研究所を攻撃したいのなら、文脈から切り離れたノルテの一節ではなく、現代史研究所やその所長の作品を批判するべきだとし、ヴィンクラーも他の批判者もそれをしていないとした。メラーは、ヴィンクラーや他の批判者が「五十年の歴史のなかで国民社会主義の独裁及びその犯罪の解明に最大の功績を果たした研究所」の体面を意図的に傷つけているとし、自分の就任後も研究所の役割は変わっていないと主張した。メラーはこの運動の理由として、自分の国防軍展覧会への批判を封じようとしているのだとし、しかもメラーの批判を「かなりの部分正しい」としていたヴィンクラーの行為を「裏切り」と呼んだ。メラーは、現代史研究所所長にも論争で自分の立場表明をする権利があるとし、自分が講演をする許可をヴィンクラーから得る必要があるのかと問うた。メラーはヴィンクラーが、自分が学術顧問でもある現代史研究所の体面を傷つけたが、それ以上に自分の体面を傷つけたのだとした。最後にメラーは、「言論の自由は、我が国では法的・政治的ではなく、公共での威嚇の雰囲気によって脅かされている」と述べた。ここでメラーは辞任要求については触れず、黙殺した形となった。この態度表明も、現代史研究所の公式サイトに掲載された²⁶⁾。

このメラーの反撃には、かつて現代史研究所で研究員を務めた八名が抗議を行った（ベルリン工科大学ヴォルフガング・ベントツ（一九四一年）、ポーフム大学教授ノルベルト・フライ（一九五五年）、ドレス

デン工科大学教授クラウス・ディートマール・ヘンケ（一九四七年）など）。メラーこそ研究所の体面を損なつたとする彼らの宣言は、メラーがドイツ代表団議長を務める独露現代史研究共同委員会の準備会議（六月二二日ベルリン）で行われた。その会員でもあつたヴィンクラーは、その場でメラー議長の退任を要求したが、これに賛同する声は上からず、メラーは翌日の独露現代史研究共同委員会の本番でもドイツ代表団議長を務めた²⁷⁾。

メラー批判者は、現代史研究所の基金評議会がメラー排除に動く可能性に期待し始めた。この機関は、研究所に出資する連邦及び七州の代表者からなるが、当時は連邦及び三州がSPD主導、四州がCDU/CSU主導であり、議長はバイエルン（CSU政権）であつた。バイエルン代表は、メラーの件を話し合うことは可能だが、メラーは個人の決断の自由の枠内で行動したのみで、それを尊重するのがバイエルンの研究政策の原則だと述べた²⁸⁾。

新聞雑誌は「歴史家論争」の再来を語り始め、メラーの授業にも影響が及んだ。『南ドイツ新聞』は「歴史家論争」と題し、ミュンヘン大学で教授として講義中のメラーにカメラを向け、歴史学科の多くの同僚が沈黙していると報道した²⁹⁾。『ミュンヘン大学歴史学者・政治学者・考古学者雑誌』は、「ミュンヘンの歴史家論争？」と題し、メラーを批判はするが辞任要求はしないという、ポーフム大学名誉教授ハンス・モムゼン（一九三〇年―二〇一五年）のインタヴューを掲載した³⁰⁾。

メラー排斥運動を見て仲裁に動いたのが、元バイエルン文部大臣・ミュンヘン大学政治学名誉教授ハンス・マイヤー（一九三二年―）である。マイヤーは『ディ・ヴェルト・オンライン』に公表されたヴィンクラーへの書簡（六月二八日）で、ノルテへの懸念を共有しつつも、ヴ

インクラーの「脅迫」を無作法だとし、ヴィンクラーは「検閲官」ではないだろう、ヴェーラーやコッカがメラー辞任を要求しているのはヴィンクラーとの共同作戦だろうと指摘した。マイヤーは、自分がゲルハルト・リッター及びフランツ・シュナーベルという異なる方向性の恩師を持つた「幸運」を語り、この二人の一方が他方をメディアで攻撃することなどなかったとし、異なる立場の共存を許さない現代ドイツ社会の風潮を嘆いた。またマイヤーは、時事問題に関するノルテの片言隻語を文脈から切り取り、また即興の言葉を論^{あげろ}つて非難する風潮を問題視し、ノルテの学問業績についても真剣に検討するべきだとした。⁵⁵⁾

なお『国民とヨーロッパ』、『ユンゲ・フライハイト』といった右派急進主義の雑誌は、これを契機にノルテを評価する記事を載せている。前者は、ノルテが学界に新風を呼び起こし、国民社会主義犯罪の「唯一性」を疑い、冷戦終焉後の『共產主義黒書』の先駆となったと称讃した。後者は、ノルテの受賞演説の全文を掲載し、シュレーダー政権の文化・メディア大臣ミヒャエル・ナウマンが現代史研究所所長メラーを批判する声明を出したと報じ、また「実存的敵対者に対しても客観性への意志を示す」のがノルテの学風だと、その挨拶を肯定的に引用した。⁵⁶⁾

4 論争後の展開

第二の歴史家論争は三十年戦争に似ている。二つの信仰を掲げる勢力が激しくぶつかったが、どちらも相手を倒せなかった。第一の歴史家論争では、「ポスト・ナショナル」が呼号されドイツ統一も見通せない状況下で、「一九六八年の理念」が圧倒的優位を占め、反対派は影を潜めた印象があった。これについての研究も、ハーバーマスの主張に沿い

ノルテを問題視するものが多く、ノルテが村八分の扱いを受けることになる。第二の歴史家論争でも、「一九六八年の理念」は攻勢に出て、限定的なノルテ支持をも排除する勢いを示したが、最終的には擡頭した「一九九〇年の理念」を駆逐するに至らなかった。そのためか、この事件を扱う研究も出なかった。このような違いは、ドイツ再統一による状況変化の帰結と見るべきだろう。両派は共存するようになり、主導権争いが続くことになる。⁵⁷⁾ 一方でヴィンクラーはシュレーダー政権の軍師、政界一般の相談役としてベルリンで重きをなし、その著書『長かった西欧への道』、『西欧の歴史』は、彼の西欧主義的歴史観を遺憾なく表現した。なおメラーも指摘したように、ヴィンクラーの統一後の議論は「共產主義」への嫌悪感、イスラム圏への警戒、ドイツ国民国家の称揚と云う点ではノルテに近い。他方でメラーも最後まで辞任しなかった。シュレーダー政権の連邦教育研究大臣エーデルガルト・プールマンもメラー罷免に向けて動いた（基金理事会を動かそうとしたか）⁵⁸⁾ というが、実現はしなかった。唯一の正当性を主張するイデオロギーというメラーの表現は、学生運動家や、メラー排除を狙ったヴィンクラーらへの揶揄でもある。二〇〇五年にはメルケル政権が誕生し、「一九六八年の理念」を体現した赤緑政権の時代は終わった。二〇一一年に六十八歳になったメラーは、現代史研究所所長、ミュンヘン大学教授を退任した。後任の所長には、アウクスブルク大学正教授となっていたメラー門下生アンドレアス・ヴィルシングが就任し、彼はミュンヘン大学正教授も兼ねた。二〇一二年夏には、メラーを長年支えた副所長ウド・ヴェングストの後任として、メラー門下生のマグヌス・プレヒトケンが就任した。メラーが残した最後のプロジェクトだった注釈付き『我が闘争』の編纂は、まさに国民社会主義を「理解可能にする」試みである。それはメラ

の門下生たちの下で、クリステイアン・ハルトマンを責任者として進められ、二〇一三年にユダヤ人団体からの抗議でバイエルン州政府から援助を打ち切られたにも拘らず、二〇一六年一月に刊行された。なおこの年の八月一日、ノルテはベルリンで死去した。

二〇二〇年現在のドイツ連邦共和国は両極化している。一方で「ドイツのための選択肢」が擡頭してCDU/CSUが後退し、他方で緑の党が擡頭してSPDが激減するというように、「一九六八年の理念」と「一九九〇年の理念」との間の溝は深い。例えば二〇〇〇年のノルテ受賞を巡る論争は、再統一後のドイツ社会がこのように両極化していく過程に存在した、一つの二里塚だったのかもしれない。

注

- (1) 『アル・シュピーゲル』は「歴史家論争は再来する虞があるのか」という記事の題目を掲げている(Reinhard Mohr, „Verwilderung der Sitten“, in: *Der Spiegel*, Nr. 25, 19. Juni 2000, S. 264.)。
- (2) Hans-Ulrich Wehler, *Entsorgung der deutschen Vergangenheit? Ein polemischer Essay zum „Historikerstreit“*, München: Beck, 1988; Wolfgang Wippermann, *Umstrittene Vergangenheit. Fakten und Kontroversen zum Nationalsozialismus*, Berlin: Espresso 1998; Richard J. Evans, *Im Schatten Hitlers? Historikerstreit und Vergangenheitsbewältigung in der Bundesrepublik*, Frankfurt(Main): Suhrkamp 1991, usw.
- (3) Ernst Nolte, *Rückblick auf mein Leben und Denken*, Reinbek/München: Lantana-Verl., 2014, S. 11-49; Ders., *Die dritte radikale Widerstandsbewegung: Der Islamismus*, Berlin: Landt, 2009, S. 413.
- (4) エルンスト・ノルテ(ドイツ現代史研究会訳)『ファシズムの時代

——ヨーロッパ諸国のファシズム運動 1919-1945』上下巻(福村出版、一九七三年)。

- (5) Ernst Nolte, „Vergangenheit, die nicht vergehen will“, in: „*Historikerstreit*“, *Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung*, 9. Aufl., München: Piper, 1995, S. 39-47(エルンスト・ノルテ(清水多吉/小野島康雄訳)「過ぎ去ろうとしない過去」, 三島憲一ほか編訳『過ぎ去ろうとしない過去』(人文書院、一九九五年)、三九-四九頁)。
- (6) Jürgen Habermas, „Eine Art Schadenabwicklung“, in: „*Historikerstreit*“, S. 62-76(ユルゲン・ハーバーマス(辰巳伸知訳)「一種の損害補償」、『過ぎ去ろうとしない過去』, 五〇-六八頁)。
- (7) 例えば姫岡とし子(一九五〇年)の最終講義「私と女性史・ジェンダー史」(二〇一六年三月一九日東京大学文学部二番大教室)にも、当時の勤務先である立命館大学と提携していたフンボルト大学で日本語教師に就任することを夢見ていたのに、東独政変でそれが実現しなかったと慨嘆する一節がある(https://www.youtube.com/watch?v=K0_c2KE310A:二〇一九年一月二三日視聴)。木村靖二(一九四三年)の『兵士の革命——1918年ドイツ』(東京大学出版会、一九八八年)にも、はしがきに留学したフンボルト大学の関係者への謝辞がある。
- (8) Nolte, *Rückblick auf mein Leben und Denken*, S. 72-92; Siegfried Gerlich im *Gespräch mit Ernst Nolte*, *Einblick in ein Gesamtwerk*, Schnellroda: Edition Antaios, 2005, S. 27-43.
- (9) 大石紀一郎「ユールドハーゲン論争と現代ドイツの政治文化——挑発、演出、そして〈歴史〉と〈記憶〉の闘いについて」、『ドイツ研究』第二四号(一九九七年)、七七一-〇八頁。

- (10) 石田勇治『過去の克服——ヒトラー後のドイツ』(白水社、二〇〇二年)、二九六―三〇〇頁。
- (11) ユルゲン・ハーバーマス(三島憲一訳)「ドイツはノーマルな国民国家になったのか」、『思想』第八三二号(一九九三年)、二〇―三二頁；ギンター・グラス(高本研一訳)『ドイツ統一問題について』(中央公論社、一九九〇年)。
- (12) 本論は、一九九〇年に生まれた思想がドイツ・ナショナリズムだけだと言っているわけではなく、二〇世期末のドイツ・ナショナリズム復活の契機となったのが同年のドイツ再統一なので、この概念を提案しているのである。従来から知られる「一九六八年の理念」にしても、この年に生まれた思想が一つだけだという意味では、よもやあるまい。なお先行研究では、「八九年代」という表現が用いられることがあった(川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム——西側結合と過去の克服をめぐる』(リネルヴァ書房、二〇〇三年)、三〇頁)。筆者がこれを踏襲しないのは、ドイツ国民国家理念の急速な復活が一九九〇年前半の現象であり、印象的な統一式典が行われたのも同年一〇月三日だったからである。なお再統一後のナショナリズムについては、三島憲一『文化とレイシズム——統一ドイツの知的風土』(岩波書店、一九九六年)なども扱い、かねてから注目されてきたが、メラウという人物は無名なままであった。
- (13) Heimo Schwilk/Ulrich Schacht (Hrsg.), *Die selbstbewußte Nation. „Anschwellender Bocksgesang“ und weitere Beiträge zu einer deutschen Debatte*, Frankfurt(M): Ullstein, 1994.
- (14) 石田勇治『過去の克服』、三〇〇―三〇三頁；Frank Schirrmacher (Hrsg.), *Die Walsen-Bubis-Debatte*, Frankfurt(M): Suhrkamp, 1999.
- (15) Horst Möller, *Aufklärung und Demokratie. Historische Studien zur politischen Vernunft*, München: Oldenbourg, 2003, Umschlag.
- (16) „Personalverzeichnisse“, in: Horst Möller/Udo Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte. Eine Bilanz*, München: Oldenbourg, 1999, S. 549.
- (17) Martin Broszat, *Zweihundert Jahre deutsche Polenpolitik*, München: Ehrenwirth, 1963.
- (18) Martin Broszat, „Wo sich die Geister scheiden“, in: „Historikerstreit“, S. 189-195 (ブルテューン・ブロンシャート(細見和之訳)「各人の立場はよく分かるのか」『過去をめぐるといふ過去』、一五二―一五九頁)。Norbert Frei, „Hitler-Junge, Jahrgang 1926“, in: *Die Zeit*, 38/2003, 11. September 2003.
- (20) „Personalverzeichnisse“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 549.
- (21) „Chronik des Instituts“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 529, 534.
- (22) Horst Möller, „Es kann nicht sein, was nicht sein darf“, in: „Historikerstreit“, S. 322-330; Thomas Nipperdey, „Unter der Herrschaft der Verdacht“, in: *Ebenda*, S. 215-19.
- (23) Rainer Blasius, „Zwischen Laudatio und Kritik“, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 6. Juni 2000, S. 3.
- (24) Hans Günter Hockerts, „Die Edition der Groebels-Tagebücher“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 249-264.
- (25) Frank-Lothar Kroll, „Die Edition von Hitlers Reden, Schriften und Anordnungen“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 237-247.

- (26) Volker Dahn, „Obersalzberg“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 159-167.
- (27) Rainer A. Blasius, „Der ehrenvolle Auftrag des Auswärtigen Amts: AAPD“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 127-144; Hartmut Mehringer, „Zur Entstehung der Außenstelle Berlin“, in: Möller/Wengst (Hrsg.), *50 Jahre Institut für Zeitgeschichte*, S. 145-157.
- (28) 中田潤「国防軍の犯罪と戦後ドイツの歴史認識」『茨城大学人文学部紀要：社会科学論』第三五号（二〇〇一年）一―一八頁；石田勇治『奥法の克服』二二―二五頁；Horst Möller, „Eine Blamage, wahrlich keine Pionierleistung“, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, Nr. 1, 3. Januar 2000, S. 8.
- (29) „Merkel distanziert sich von Preis für Nolte“, in: *Süddeutsche Zeitung*, 23. Mai 2000, Nr. 118, S. 5.
- (30) Nolte, *Rückblick auf mein Leben und Denken*, S. 115 f.
- (31) Festschrift zur Verleihung der Konrad-Adenauer-Preise 2000 für Wissenschaft und Literatur, Deutschland-Stiftung e.V.
- (32) Johannes Willms, „Die Fahne hoch“, in: *Süddeutsche Zeitung*, 22. Mai 2000, S. 15
- (33) „Rehabilitation“, in: *Frankfurter Rundschau aktuell*: <http://www.fr-aktuell.de/fr/index.htm>（二〇〇〇年五月十九日閲覧）.
- (34) „Lagergemeinschaft Dachau e.V. (Vorsitzender Max Mannheimer) an die Vereinigung der Verfolgten des Naziregimes“, 28. Mai 2000 (Archiv des IFZ, ID 34/226).
- (35) Gustav Seibt, „Wie hält man eine Preisrede auf Ernst Nolte?“, in: *Die Zeit*, 23/2000, 31. Mai 2000.
- (36) „Null Nolte! Winkler schreibt an Möller“, *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 31. Mai 2000.
- (37) Heinrich August Winkler, „Auf ewig in Hitlers Schatten?“, in: „*Historikerstreit*“, S. 256-263.
- (38) Linkeliste ★ an der Universität München, „Offener Brief an Horst Möller“, München 2. Juni 2000 (Archiv des IFZ, ID 34/226)
- (39) Stefan Reinecke, „Streit um Ehrung von Ernst Nolte“, in: *Der Tagesspiegel online*: <http://www.tagesspiegel.de/archiv/2000/06/01/ak-ku-de-17065.html>（二〇〇〇年六月一日閲覧）.
- (40) Elisabeth Bauschmid, „Im Schwarzen Loch“, in: *Süddeutsche Zeitung*, Nr. 127, 3./4. Juni 2000, S. 19.
- (41) Horst Möller, „Laudatio auf Professor Ernst Nolte“ (Archiv des IFZ, ID 34/226).
- (42) Ernst Nolte, „Was ist ‚historischer Revisionismus‘?“, (Archiv des IFZ, ID 34/226).
- (43) Ernst Nolte, „Dankrede von Professor Dr. Ernst Nolte“ (Archiv des IFZ, ID 34/226).
- (44) Daniel Hauffler, „Nur ein Rücktritt ist ein richtiger Schritt“, in: *die tageszeitung*, Nr. 6159, 5. Juni 2000, S.1 f.
- (45) Peter Schmatz, „Ehren mit Einschränkungen“, in: *Die Welt online*: <http://www.welt.de/daten/2000/06/05/0605hb171936.htm>（二〇〇〇年六月五日閲覧）.
- (46) Rainer Blasius, „Zwischen Laudatio und Kritik“, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 6. Juni 2000, S. 3.
- (47) „Brief an die SZ vom 14. Juni 2000: Leserbrief von 29 wissenschaftlichen

- Mitarbeiterinnen und Mitarbeitern an die Süddeutsche Zeitung“, gezeichnet von Patrick Bernhard M.A., Andrea Cors M.A., Dr. Volker Dahm, Jaromir Dittmann-Balcar M.A., Albert A. Feiber M.A., Dr. Elke Fröhlich, Peter Gohle M.A., Dr. Christian Hartmann, Dr. Johannes Hürter, Dr. Matthias Jaroch, Dr. habil. Manfred Kittel, Dr. Katja Klee, Dr. Klaus A. Lankheit, Dr. Mechthild Lindemann, Dr. habil. Hartmut Mehringer, Dr. Mathias Peter, Dr. Dieter Pohl, Dr. Edith Raim, Dr. Thomas Raltheil, Dr. Thomas Schlemmer, Dr. Marc Dieter Schneider, Dietmar Süß M.A., Dr. Daniela Taschner, Andreas Toppe M.A., Dr. Petra Weber, Dr. Christoph Weisz, Dr. Joachim Wintzer, Dr. Hans Woller und Dr. Jürgen Zarusky.
- (48) Rainer Blasius, „Ins Gerede gekommen“, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 6. Juli 2000, S. 16.
- (49) Christine Burtscheidt, „Historikerstreit“, in: *Süddeutsche Zeitung*, Nr. 147, 29. Juni 2000, S. L3; Reinhard Mohr, „Die Wilderung der Sitten“, *Der Spiegel*, Nr. 25, 19. Juni 2000, S. 264.
- (50) Horst Möller, „Stellungnahme zum offenen Brief von H. A. Winkler in der Wochenzeitung „Die Zeit“ vom 15. Juni 2000“, München 15. Juni 2000 (Archiv des IZ, ID 34/226).
- (51) Blasius, „Ins Gerede gekommen“, S. 16.
- (52) Blasius, „Ins Gerede gekommen“, S. 16.
- (53) Christine Burtscheidt, „Historikerstreit“, in: *Süddeutsche Zeitung*, Nr. 147, 29. Juni 2000, S. L3; Reinhard Mohr, „Verwilderung der Sitten“, in: *Der Spiegel*, Nr. 25, 19. Juni 2000, S. 264.
- (54) „Hans Mommsen über den umstrittenen Preisträger Ernst Nolte“, in: *zeitschrift der historiker, politologen und archäologen an der uni münchen*, November 2000, S. 8 f.
- (55) Hans Maier, „Mit dem Tremolo staatsmännischer Besorgnis“, in: *Die Welt online*, 28. August 2000, in: <http://www.welt.de/daten/2000/06/28/0628ku176437.htm> (110000年六月30日閲覧).
- (56) „Prof. Dr. Ernst Nolte“, in: *Nation und Europa*, [Datum unleserlich] 2000 (Archiv des IZ, ID 34/226); „eilige presse-information [der Jungen Freiheit]“, Berlin, 19. Juli 2000 (Archiv des IZ, ID 34/226); „Wille zur Objektivität“, in: *Junge Freiheit*, 21. Juli 2000, S. 1; Ernst Nolte, „Kern der Differenz“, in: *Ebenda*, S. 14.
- (57) 類似の展開になったのが二〇一〇年のザラツィン論争である。今野元「ザラツィン論争——体制化した「六八年世代」への「異議申立」」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第一四号（二〇一三年）一七五—二〇四頁。
- (58) ホルスト・メラーと筆者との対話（二〇一三年一月二三日、現代史研究所）。
- (こんの はじめ・愛知県立大学教授)